

境界 8

私は残った。

私たちの時代があまり好まない言葉がある。

留まること。

古い言葉のように聞こえる。

流行遅れの。

ほとんど疑わしいほどの。

私たちは、動きと速さと絶え間ない変化を讃える時代に生きている。すべては素早く変わらなければならない。すべては取り替えられなければならない。すべては進化しなければならない。

それでも、自分の人生を眺めてみると、最も深い痕跡を残した人々は、最も速く走った人々ではなかった。

残った人々だった。

同じ場所に残ったのではない。

同じ地位に残ったのではない。

同じ習慣に残ったのではない。

何かに忠実であり続けたのだ。

一つの原則に。

一つの責任に。

一つの約束に。

一人の人間に。

自分自身の本物の部分に。

長いあいだ、私は成功と動きを混同していた。

旅をするほど、働くほど、経験を積むほど、前進している気がした。

一部は本当だった。

だが、それは真実の一部にすぎなかった。

もう一つの部分を知ったのは、ずっと後のことだ。

前進するとは、必ずしも遠ざかることではない。

ときには、留まることを意味する。

投げ出すことが最も簡単な選択だった瞬間を、いくつも覚えている。

選択肢がなかったからではない。

その逆だ。

選択肢は数多くあった。

新しい機会。

新しい方向。

新しい始まり。

世界はいつでも新しい出発を差し出す。

継続を差し出すことは、はるかに稀だ。

継続は築かなければならない。

一日また一日と。

拍手もなく。

見出しもなく。

観客もなく。

人生の見えない部分で。

ほとんど誰も目にしない部分で。

時が経つにつれ、誰もが異なる季節を通り抜けるのだと気づいた。

獲得の季節がある。

発見の季節が。

成長の季節が。

そして、耐える季節がやって来る。

そこでの問いは、こうではない。

「どこまで遠くへ行けるか」

こうだ。

「どれだけ存在し続けられるか」

難しい季節だ。

すぐに目に見える成果を生まないからだ。

英雄的な写真を許さない。

華々しい物語を生み出さない。

だが、人格を形づくる。

勝利よりも、はるかに。

並外れた経歴を築きながら、一つの関係を築けなかった人々を知っている。

巨大な組織を率いることはできても、難しい会話に向き合えない人々を。

世界を手に入れ、自分自身を失った人々を。

彼らを見て、私は一つのことを学んだ。

残るということは、地理の問題ではない。

道徳の問題なのだ。

国を十度変えても、大切なものに忠実であり続けることはできる。

同じ通りで一生を過ごしながらか、持てるすべての原則を裏切ることできる。

違いは、移動した距離にあるのではない。

忠実さにあるのだ。

忠実さは、しばしば誤解される言葉だ。

多くの人はそれを不動と結びつける。

私は一貫性と結びつける。

忠実さは、変わることを妨げない。

自分を見失うことを妨げるのだ。

そしてこの区別こそが決定的だ。

年月の中で、私は多くの変化をくぐり抜けてきた。

仕事の上での。

個人としての。

内面の。

自ら選んだものもあった。

人生に強いられたものもあった。

すべてが心地よかったわけではない。

すべてが正しかったわけではない。

だが、一つのことを保とうとした。

口にすることと行うことの連続性だ。

いつも成功したわけではない。

いつも成功できる者などいない。

だが、試みた。

そして人生はしばしば、まさにそれを測る。

試みを。

完璧さではなく。

最も広まっている幻想の一つは、力が例外的な瞬間に現れるというものだ。

私はその逆を知った。

力は反復の中に現れる。

毎朝起き上がることの中に。

なすべきことをなすことの中に。

誰も気づかないときに存在し続けることの中に。

守られるに値するものを見捨てないことの中に。

それは静かな英雄的行為だ。

ほとんど見えない。

そしておそらく、まさにそれゆえに本物なのだ。

私の存在を貫いてきた絆のことを、よく考える。

家族。

友人。

仕事の仲間。

愛した人々。

それらの絆の多くが生き残ったのは、誰かが残ったからだ。

完璧ではなく。

無敵でもなく。

ただ、そこにいたのだ。

困難が訪れると、誰が残る覚悟を持っているのか、
すぐに分かる。

すべてがうまくいっているとき、私たちは人々に囲
まれている。

すべてが難しくなると、群衆はまばらになる。

そしてその瞬間にこそ、本物の存在が浮かび上がる。

数は少ない。

だが、それで足りる。

人生の質が、出会う人の数で決まることはめったに
ない。

道が険しくなったときに残る人の数で決まるのだ。

年月が経つにつれ、留まることを勇気の一つの形と
考えるようになった。

逃げることも、はるかに難しい。

最初の熱意よりも、はるかに難しい。

約束よりも、はるかに難しい。

約束は一瞬で口にされるからだ。

留まることには年月がいる。

断念がいる。

忍耐がいる。

人格がいる。

多くの者が始める。

続ける者は少ない。

残る者はさらに少ない。

振り返れば、自分のすべての決断を誇れるわけではない。

誰であれ、そうであるべきではない。

だが、一つだけ認められることがある。

本当に大事な場面では、そこにしようとした。

家族のために。

愛した人々のために。

引き受けた責任のために。

交わした言葉のために。

いつも完璧なやり方ではなかった。

だが、できる限り誠実なやり方で。

最後に、人生はおそらく、いくつかの場所を通り過ぎたかを問わないだろう。

いくつの肩書を積み上げたかを。

いくつの成功を集めたかを。

おそらく、もっとずっと単純な問いを投げかけてくるだろう。

「残るべきときに、おまえはどこにいたのか」

私の答えは完璧ではない。

だが、正直だ。

私は残った。